

風の便り (第56号)

発行日:平成16年8月

発行者:「風の便り」編集委員会

180度の路線転換

—選挙に勝てる生涯学習—

■ 1 ■ 過去の役割は終わった

熊本県天草の富崎さんのご注文は合併に伴う公民館の徹底した未来予測である。筆者も従来の公民館の歴史的経緯に囚われることを止めた。富崎さんの姿勢に刺激されて思いきった分析を自分に課し、安易な楽観論を排して論じた。富崎さんも筆者も合併が公民館にもたらすものは非常に厳しいと予想している。過疎化の続く地方では、疑いなく合併は地方行政に対する「効率の要求」である。それゆえ、合併がもたらす広域化の財政は合併する市町村の単純「足し算」にはならない。最重要課題は財源の削減である。財源の削減はまず事業の精選と削減で行う。次は、事業を民間に委託する。委託も、精選も目的は人員の削減である。財源削減の本丸は人件費であることはいうまでもない。結果的に、少数の職員の目は合併後の広域化した全域には行き届かない。それゆえ、「地域格差」の拡大、「生涯学習格差」の拡大を避けることは難しい。

上記の状況を考慮すれば、未来の公民館像は従来の公民館の歴史的機能の範囲の中だけで論じるわけには行かない。行政の他の分野の機能と比較考量して、果たして現在の公民館事業は生き残るだけの価値を有しているか？分析はそこから始めなければならない。結果的に、公民館経営路線の180度の転換を提案することになった。極論であることを恐れたが、天草の参加者からは、提案の主旨は前向きに受取られ、関係資料の問い合わせも少なくなかったと聞いた。時代は動いているのである。折しも鹿児島県の大久保哲志さんから市長村長を集める研修会のご依頼をいただいた。当然、公民館も、社会教育行政も大きく動くべき時なのである。富崎さんの御縁で「公民館生き残りの条件」をまとめたが、こんどは大久保さんの御縁で「選挙に勝てる生涯学習」を論じる。果たして、地方の政治家はわかってくれるだろうか！？

目次

- 1 ● 180度の路線転換—選挙に勝てる生涯学習—・・・P1
- 2 ● 第48回生涯学習フォーラム報告
「地域における子育て支援の方法」・・・P8
- 3 ● 教育の臨界点 (Critical Point)
—「量」が「質」に転換する時—・・・P10
- 4 ● ボランティアの失望・・・P11
- 5 ● Message To and From・・・P12
- 6 ● 編集後記 精神のふるさと・・・P14

■ 2 ■ 公民館の未来課題 「子育て支援」と「熟年の活力の存続」

「少子化」が社会の未来を脅かし始めた。老人「介護」も社会の財政を脅かし始めた。日本社会の緊急課題はこの二つである。公民館の未来課題もこの二つである。公民館は日本社会の最優先課題に対応しなければならない。

日本社会の最優先課題は、子育て支援であり、高齢者の活力の保持存続である。子育て支援のシステム化は、「養育」の社会化である。家庭に代わって、あるいは家庭を全面的に支援して子育ては社会が引き受けることである。異論もあろうがすでに多くの家庭には子育ての責任能力は存在しない。そのことは子どもの現状が雄弁に物語っている。しかも、一方で少子化も止らない。「少子化」を防止して男女共同参画の条件を整備しなければ、将来の社会保障はあり得ない。介護を社会化し、老後の生活を社会が保証しようという制度を維持しようとする限り、生産人口が縮小すれば制度の前提が崩壊する。もちろん、高齢人口が増大して心身の衰弱に任せれば、医療費も、介護費も破綻する。「介護予防」の失敗と「少子化対策」の遅れは明らかに国家の福祉制度を破壊する。多くの高齢

者は路頭に放り出される。まして、団塊の世代が定年を迎えるこれからが高齢社会の問題が噴出する時期である。

公民館は従来のすべての仕事を停止して「子育て支援」と「熟年の活力の保持・存続」のプログラムに取り組むべきである。しかしながら、現在の公民館／社会教育行政の実力では二つの問題に別々に取り組む余裕はない。それゆえ、両者は総合的なプログラムの中に統合しなければならない。統合の方法は、熟年の指導者を組織化し、彼らの力を活用した「養育の社会化」を実行することである。熟年の力を借りて、子育て支援のプログラムを立ち上げるのである。この事業の中核機能の遂行こそ公民館の未来課題である。少子高齢社会の活力は子どもと老人の元気が握っている。子どもと老人の世話をして来たのは女性である。それゆえ、選挙の帰趨は女性票と熟年票が握っている。公民館／社会教育行政が女性と熟年を応援するプログラムに切り替えることは、緊急課題に対応するだけではない。財政難時代の政治判断として最も分かり易いのである。

■ 3 ■ 成熟した市民;「リピーター」へのサービスは止めるべきである

社会教育審議会が「生涯教育」理念を提示したのは昭和46年(1971年)である。これに遅れること10年、昭和56年(1981年)、国の中央教育審議会は、ようやく教育行政の全分野において、生涯学習の重要性を正式に認知する答申を行った。ここまでは従来どおりの行政の縦割りに習った極めて狭い文部行政の範囲に限った話である。社会教育局に始まった「微細革命」が辛うじて教育行政全分野をカバーする「部分革命」に至ったのである。

中央審議会の答申からさらに6年、昭和62年(1987年)、時の総理大臣の下に召集された臨時教育審議会は、初めて、日本人の全生活分野にまたがった生涯学習の必要性を答申した。生涯学習革命の国家的認知である。

一連の流れの中で日本の知的風土が著しく変化した。筆者はこの変化を緩やかな「生涯学習

革命」と呼んでいる。革命はまず、従来、「鑑賞者」に留まった日本人を「創造者」に変えたのである。生涯学習革命は日本社会の学習者の底辺を一挙に拡大した。市民生活における「パンとサーカス」の圧倒的な力は今も変わらないが、従来多くの「鑑賞者」は「作成者」となり、「観戦者」は「プレイヤー」となり、「読者」はみずから「作家」となり、「視聴者」もみずから「演技者」や「演奏者」となったのである。生涯学習センターや公民館で行われる「生涯学習フェスティバル」や「文化祭」には素晴らしい焼き物、書画、彫刻、刺繍、木工物、演劇、コーラス、舞踊などが勢ぞろいして壮観である。みずから創造活動に参加する市民の活動成果は増加の一途を辿っている。もちろん、活動の中心は公民館であった。しかし、問題は、公民館に来る「お客」の大部分が「リピーター」になったことである。公民館の利用者が固定して拡大が止まっている

のである。多く見積もってもいまだ半分程度の公民館利用人口に税金を投入している。残りは生涯学習には関知していない。したがって、参加者に自主活動／受益者負担を課さない以上、このようなサービスは税負担の公平の原則に反している。

国・地方の財政難は今や明らかである。成熟した市民；「ピーター」への税金によるサービスは止めるべきである。従来の公民館講座や各種の学級は目覚めた市民の自主性に任せて、限られた財源は緊急の課題に重点的に投資すべきである。

■ 4 ■ パチンコ屋には勝てない 一生涯学習実践者の「深耕」は限界

生涯学習の原理は「選択」である。選ぶ自由もあれば、選ばない自由もある。市民の「学習需要をもっと開発せよ」という意見が聞こえて来そうであるが、すでに生涯学習革命30年、役所主導の公民館ができることはやり尽くしたのである。現在の公民館に現状機能を拡大・革新する力量はない。したがって、生涯学習実践者の今以上の開発は不可能である。公民館は「パンとサーカス」には勝てず、パチンコ屋さんには勝てない。一度でもいいからパチンコ屋さんに行って公民館の広報ビラでも配ってみたい。人々の無関心の度合いが分るであろう。また、公民館を設置している当の市役所や役場職員の公民館事業への参加率を調べてみればよい。学習者の「深耕」はもはや不可

能である。筆者がでかける役場研修にはいつも義理で出てくるお座なりの顔が並んでいる。理論面でも、実践面でも、生涯学習は遺憾ながら未来の投資価値の存在証明にしくじったのである。

現状の公民館事業を続ければ、税金投入による「生涯学習格差」は増大する一方である。個人が自己負担によって生涯学習に投資する分については、消費の選択、行動の自由が原則である限りとやかく言うべき筋合いのものではない。しかし、行政サービスによって、社会教育はこれ以上国民の中の「生涯学習格差」の拡大を助長するべきではない。

■ 5 ■ 「外部化」の必然

家族は今や沢山の子どもを育て切れない。女性を中心に「子育て」を負担と感じている現代の家族は複数の子どもを育てたいとも思っていない。それを決めるのは主として女性の意志である。総論的に言えば、「少子化」は男支配の文化とシステムへの女性からの「絶縁状」である。「少子化」を止めるためには女性に納得してもらうしか方法はない。女性を納得させる方策は二つある。第一は「変わりたくない男」が男女共同参画文化を理解して、家事や育児を引き受けるような自己変革を遂げることである。第二は、社会が養育の相当部分を引き受けることである。食や洗濯やもろもろの日常生活を外部化したように、養育の外部化が必要になったのである。核家族化が定着し、就労する女性が増加し、すでに現代の家族は子育て機能を衰退させてしまった。子どもの健全な発達のためにも、家庭外の安全な場所での子どもの集団のあそびや活動の機会を創造することが必要になっ

たのである。

家事の外部化は女性の社会進出がもたらした必然である。育児の外部化も同じ原理で動いている。もちろん、それを可能にしたのは豊かな社会の分業の進化である。企業は、今になって「アウトソーシング(戦力的外部委託)」の重要性を言うようになったが、家族はその構成員の能力的制約に鑑みて、多くのことを「外部委託」せざるを得ない宿命にあった。近代家族においては「教育」がそのはしりであった。教科教育は家族の能力を越えている。かくして、学校教育はその道のプロに委託せざるを得なくなった。最近では「介護」も同様の方向を辿っている。外部化が進む理由は、「委託」を可能にする財政能力と「委託」せざるを得ない家族の状況である。保護者の多くは”共稼ぎ”の労働形態に移行し、多くの家庭は「委託」の可能性と「委託」の必要性の両面で子どもの外部保育；社会の子育て支援を必要とするようになったのであ

る。子育ては「親の責任」という論はすでに時代にマッチしない。筆者は長年の持論を捨てて、「家庭の子育て責任」論から「養育の社会化」論に考え

方を転換した。少子化への対応と男女共同参画社会推進を最優先すれば、避けることのできない選択であった。

■ 6 ■ 選択型支援の限界

子育ては原始の昔から原則として家族の中で始まる。しかし、現代の家族・家庭はもはや子育ての任務と機能を十分には全う出来ない。膨大な不登校児童の存在はそのまぎれもない証である。学校の低学年授業が授業にならない「授業崩壊」現象も家庭の育児機能不全の実態を如実に物語っている。

それゆえ、「子育て支援」の目的を大別すれば二つである。第1は子どもへの直接的支援。第2は保護者、特に女性の「育児負担」に対する直接的支援である。この際、施策の現状は批判的に分析しなければならない。現在、行われている「家庭教育相談事業」や「子育てサロン」や「育児教室」などは行政による「間接支援」である。家族や家庭環境の格差を放置したままの支援である。「間接的支援」は選択的支援である。それゆえ、自覚し

た家庭にしか届かない。意識した保護者にしか届かない。市民が選択しなければ意味はない。市民が活用しなければ気休め以上の意味は持たない。

行政サービスの実態も、PTAの研修も、支援を必要とする市民にはほとんど届いていない。したがって、ほとんど役には立っていない。何よりの証拠は育児を巡る保護者の問題も、子どもの「質」を巡る問題もその大部分は解決されていないことである。子育て問題はますます多発し、ますます深刻化している。親の関心を原点にすれば関心のない家族には届かない。必要な支援も必要な家族には届かない。現代の子育て支援は子どもへの直接支援でなければならない。放課後にも、休日にも、子どもの「生きる力」を直接的に向上させるプログラムが不可欠なのである。

■ 7 ■ 「生きる力」の活動メニューの導入

子どもの生き生きとした活動は「居場所」を作っただけでは始まらない。それはすでに数十年にわたる「学童保育」の実践で学んだ筈である。現行の子どもの「ひろばづくり」の施策も、「子どもの居場所づくり」の方策も、地域環境の構造変動を十分には理解していない。子どもの危機的状況も理解していない。居場所を作っただけでは健全な育成は出来ない。子ども集団も形成されない。子どもには

保育と活動プログラムと指導者が必要なのである。これらの3者が結合したプログラムは地域には存在しない。地域環境の構造変動はなまやさしいものではないのである。「居場所」と「子ども集団」と「指導／活動プログラム」が総合的に機能してはじめて子どもの発達に寄与する。行政の「縦割り」を排し、保育と教育を統合することが不可欠の課題になったのである。

■ 8 ■ 「保教育」概念の導入

公民館／社会教育事業が担当すべき課題は二つある。「子育て支援」と「高齢者の人材活用」である。公民館が未来の公民館になる為には、この二つを同時に実現しなければならない。その為には高齢者を子どもの活動指導に活用することである。したがって、第一の任務は子どもの活動を

指導する高齢者ボランティアの発掘と研修である。ボランティアが重要である理由は二つある。第1の理由は高齢者の衰えである。定年後、「労働」から「活動」への移行に失敗した高齢者は一気に衰弱する。活動しないということは、「頭も使わない」、「身体も使わない」、「気も、心も使わない」ということ

を意味しているからである。使わない機能は一気にその働きを衰退させる。使わない頭は回らず、歩かない足は歩けなくなる。使わなくていい機能は当人から消滅するのである。人間の感覚体の原則である。それゆえ、ボランティアは「高齢者ボランティア」、「熟年ボランティア」を中心に発掘しなければならない。高齢者が参加する子育て支援事業の基本思想は「幼老共生」である。子育て支援の表看板は「子どもの元気」であるが、劣らずに重要な裏の目的は「熟年の元気」を引き出すことである。

第2の理由は財政難である。社会教育は地域に依存した従来の青少年健全育成事業のやり

方を忘れるべきである。もはや地域は昔の地域ではない。掛け声はあっても地域に少年指導の実行力はない。もちろん、様々な分野に、指導者はいるが、今や社会教育行政に指導者に支払う旅費や謝金はない。到底、地域全域を網羅した子どもの指導は不可能である。それゆえ、ボランティアに頼る以外指導者の確保はできない。

ボランティアの指導者を「安上がりの労働力」と考えることはまことに不本意ではあるが、緊急課題に対応する為にはやむを得ない。ささやかな「費用弁償費」を計上してボランティア指導者にお出まし願う以外、子育て支援も、子どもの活動の豊かな活動も保障できないのである。

■ 9 ■ 地域人材の発掘と活用—「他薦制」の採用と研修の充実

ボランティアは異文化の思想である。それ故、日本流のボランティアシステムが必要である。日本文化が謙譲の美德を大切にしてきたことを考慮すれば、この国で「自分から手を上げる人々」はあぶないのである。ボランティアの発掘原則を「他薦制」にするのはその為である。推薦者が責任をもち、推薦して下さった方のお顔をつぶさないことがボランティアの使命と責任を支えるのである。発掘／研修／登録の責任は新しい公民館が担当すべきである。他薦で上がってきた候補者には公民館がひとりひとりボランティア参加の意志を確認する。活動の舞台を創造し、ボランティアを配置するのも活動に耐えうように研修を企画するのも公民館の役割である。個々のボランティアの活動舞台を創造し、一人一人を配置することは学級講座の企画運営の難しさに優るとも劣らない。学級や講座を企画しながら片手間にできるような生易しい仕

事ではないのである。ボランティアの活動ぶりは地域に報告してその社会的貢献を評価し、社会的承認の広報を綿密に行わなければならない。それがボランティア活動のエネルギー源である。一連の仕事は一大事業である。

筆者は公民館とボランティア事務局が同じ建物で仕事をしている状況を知っている。公平に見て、ボランティア事務局の仕事の方が遥かに複雑で、地域への貢献度も大きい。ボランティア事務局は囑託／非常勤で、公民館は正規の職員である。これでボランティア事務局が子育て支援事業を開始したら、現在の公民館を廃館にしてもなんら問題はおこらないであろう。

■ 10 ■ 子育て支援ボランティアに対する「費用弁償」予算の計上

日本のボランティアの最大の失敗はその能力やエネルギーを「ただ」で使ったことである。「ボランティアただ論」の修正は決して簡単ではない。政治家の中にも信仰のようにボランティアは「ただ」だと信じ込んでいる人がいて担当者がその実情を説いても聞く耳をもたないという例も知っている。それゆえ、己に無理を課して、長くただのボランティア

でがんばってきた人の中には鼻持ちならない感覚を振り回す人も多い。ボランティア活動を名刺に刷って配っているなどはその一例であろう。ボランティアを一部の人々の特権にしているのも、活動者の底辺が拡充しないのも、「無償性」の原則を誤解して、人々の貢献に対する費用弁償を計上しないからである。「無償」とは労働の対価を受取らない、

という意味である。活動に必要な経費まで自己負担にすれば、持続的な貢献は期待できない。ボランティアただ論は貢献者に対して失礼であるばかりでなく、人間の「善意」や「努力の継続性」を買い

被っているのである。わずかの費用弁償でも社会の感謝を受取れば、本人と社会との「見えない契約」が成立する。それがボランティアの責任感と継続性を保障するのである。

■ 11 ■ 学校開放—子どもの安全／学校の安全

言うまでもなく理論上学校は生涯学習施設である。しかし、学校の実態は生涯学習理念から最も遠い。「いつでも、だれでも」の生涯学習原則に反している。子育て支援事業こそ学校に地域の要素を導入する最大の機会である。何故なら、子育て支援は通常、同じ学校の子どもを対象としているからである。加えて、学校は子どものために設計され、子どもに合わせた環境を整えている。安全の

視点から見て、放課後に子どもが移動しなくていいということは交通事故の心配からも、移動中の不審者の心配からも解放される。更に、地域のボランティア指導者が学校に入れば、子どもの味方が校内に常駐することになる。地域の人材は事件の抑止力である。学校を開き、子どもの味方が沢山出入りするということは、学校の安全を保障する最も重要な条件である。

■ 12 ■ 学校開放—機能性／機動性の視点

公民館に何十人もの子どもを預かることはできない。多様な人々が使用する施設を子どもの独占使用にするわけにも行かない。児童館にしてもすべての学校から子どもが通って来るというわけには行かない。学校ネットワークはあるが児童館ネットワークはない。子どもが通う距離的条件においても、収容能力の条件においても限界がある。そうであればこそ、学校こそが子育て支援の拠点になるべきなのである。上記の通り、学校は唯一子どものために設計された施設と環境を有している。当該学校の子どもを預かるにあたって、移動の問題も生じない。

問題は開放を促す教育行政と学校の教職員の意識である。特に、管理運営の指揮を取るべき管理職の意識がなっていない。彼らは学校施設の公共性を忘れている。税金で建てたという出発点を忘れている。もちろん、コミュニティの文化／生涯学習施設であることはほとんど念頭にはない。

空き教室ですら提供を拒む学校の閉鎖性はすでに施設機能の「私物化」の域にすら達している。

しかし、子育て支援と高齢者の元気は現代の緊急課題である。この問題に協力しようとする時、学校はすでに社会の「敵」といっても過言ではない。公民館が担当すべき「学社連携」は、子育て支援から始めるのである。それこそが放課後の学校に最も相応しい開放目的である。行政の守備範囲が異なるという理由だけで、長い間、学校は「学童保育」を閉め出してきた。教育行政もそれに加担してきた。中央で学校開放を指導してきた文部科学省の視野の狭さ、地方政治家の発想の貧困には呆れるばかりである。学童保育の子どもも、学校の子どもも「同じ子ども」ではないのか！？それぞれが願っていることは「子どもの健全育成」ではないのか！？

■ 13 ■ 行政施策の総合化とプログラム効果のサイクル

現在の行政システムの縦割り分業の中で、教育行政はもとより、福祉も、男女共同参画も、諸事業の対象と機能は明確にその範囲が限定されて

いる。したがって、現実の課題が事業機能の統合を必要としている場合でも、行政分野ごとに事業概念が固定化されているため、具体的な必要課

題に柔軟に対応することはできない。例えば、「青少年健全育成」概念には幼児は含まれていない。それゆえ、青少年健全育成団体には、通常、保育の発想は皆無である。逆に、「子育て支援」は通常、「乳幼児の保育」を主眼としている。それゆえ、社会教育のいう学童期の少年の活動プログラムはほとんどこのような区分から「学童保育」という特別概念が分離されている。しかも、「学童保育」は「保育」概念に限定している為、「学童保育」の発想からは教育活動の意義と重要性の視点が抜け落ちるのである。

学童保育に教育プログラムを組み合わせたことができないのはまことに愚かなことであるが、妨げになっているのはそれが「保育」概念で括られているからである。「保育」概念にこだわって、教育を排除すれば、子ども達が集まっても教育活動のプログラムは導入できない。保育の担当者の言い分は自分達は教育の指導者ではないという理屈であろう。一方、社会教育の青少年プログラムの多くは逆に「保育」の重要性を無視している。それゆえ、活動の多くは活動の教育的側面にのみ重点が置かれ、年齢別、学年別、能力別編成のメニューが圧倒的に多い。概念の固定化はプログラムの融合を阻んでいるのである。

現行の行政分業の機構を変えることはできない。しかし、子育て支援は多様な分野にまたがる。そうなれば、行政システムの中に特別な「プロジェクト」を創設するしかない。この時、「プロジェクト」とは、「特定の目的を達成するための活動計画」^(*1)の意味である。したがって、日常業務の遂行システムでは実行出来ない特別課題の達成が目的である。「既存の組織においては、組織間で壁ができ易く、複数の部署を巻き込んだ横の改革を拒みが

ち」であり、「縦割りの組織においては、組織が細分化されていることにより、担当している職務に関する合理性は追求されているものの、各組織において最適化を行おうとするため」、全体の合理性の追求が難しくなるのである^(*2)。

子育て支援事業は現代の行政における「プロジェクトマネジメント」を必要とする典型である。「子育て支援」を本格化しようとするれば、学校と社会教育と福祉と男女共同参画の担当課はプロジェクトチームの最低限の構成要因である。学校は「子どもの生活・活動拠点」を提供する。社会教育は、指導者の発掘・確保と研修を担当する。福祉は「保育」の概念を拡大して、教育との融合を図り、教育行政と共同して、少子化対策および子育て支援の予算を確保する。男女共同参画の担当課は、教育行政福祉行政と共同歩調をとって、女性の社会参画と安心の子育て支援システムを両立させるべく、総合的子育て支援の意味を議会と住民に説得するのである。

上記の論理を順序だてて整理すれば以下のようなようになるであろう。

「少年の危機」→ 異分野統合による「子育て支援」システムの創造→ 拠点としての「学校の開放」→ 指導プログラムの開発と「熟年ボランティアの発掘と活用」→ 放課後及び休暇中の「児童健全育成プログラム」の実施→ 「女性の社会参画条件の拡充」→ 「少子化対応」

(*1) E-Trainer.jp 著、プロジェクトマネジメントの基本と仕組み、秀和システム、2000年、p.10

(*2) 同上、p.21

第49回生涯学習フォーラム

【日時】平成16年9月18日(土)15時～17時、 のち夕食会

【場所】福岡県立社会教育総合センター

【テーマ】(仮)「高齢者の居場所と生涯学習」

【事例発表者】交渉中

【参加論文】(仮)「戦力に成り得る高齢者、戦力外通告の高齢者」(正平 辰男)

フォーラム終了後センター食堂にて「夕食会」(会費約600円)を企画しています。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当:朝比奈)092-947-3511まで

● 2 ● 「子育てネットワーク in 九州」の活動プロセス ●●●●●●●●●●

相戸さんの指摘は現代の子育て支援が当面する重要問題を浮き彫りにしている。まず、第1は、「子育て支援施策」が氾濫している時代という認識である。支援策が氾濫状態であるにも関わらず、明らかに少子化は止っていない。それは適切な支援策がないということを意味している。第2は親が子育ての力量を形成していないという指摘である。子育て支援は大人の生涯学習でもあるべきであるが、実際は配給と受給の関係に留まっているとい

う分析である。親の育ち合いの「場」が必要なのはその為である。もちろん、ここでも「選択する親」と「選択しない親」の生涯学習格差は拡大する。「この指とまれ」方式の宿命である。生涯学習フォーラムと同じく、子育てネットワーク研究会も志縁の人間関係を基盤にしている。手作りの子育て支援実践研究交流会である。通称は”子ねっと研”である。

(1) 目的

目的の第1は「子育ての担い手の主体的な力量を形成すること」である。換言すれば、「子縁」を切っ掛けに形成する生涯学習グループである。

目的の第2は地域の実践を大切にしている人々のネットワークを作ることである。ネットワークは、活動モデルの交流と相互の学習がテーマである。子育て支援方法論の生涯学習でもある。

子育て支援は民間の力だけでは解決しない。支援は国策であるべきである。少子化の防止は国の第1課題だからである。当然、行政との協働が不可欠である。言うは易く行うは難い課題である。行政はいまだ子育て支援の重要性を認識せず、その方法にも無知である。

(2) 「子育てネットワークin九州」

関係者の思いは、志と実践を共有するたくさんの人々が登場する仕組みを作りたい、ということである。したがって、実行委員会もできるだけ多くの方々が参加できるよう地域移動型を工夫した。開催資料ではプロフィールを大切に、人々の出合いを演出している。賛同する学生ボランティアも歓迎している。「子どもの実行委員会」も試行している。最大のテーマは「出合い」である。そのために事前学習会やサロン、交流会や夜なべ談義など随所に交流の仕掛けを設けている。

九州大会のスローガンは「根を張れ、つながれ、九州交流集会2004」である。スケジュールは以下の通りである。

日時： 2004年10月2日(土)12:45
～10月3日(日)12:00
会場： 福岡県社会教育総合センター
(☎820-2402 福岡県糟屋郡篠栗町金出3350-2)

詳しいプログラムは事務局長の相戸晴子さん(092-947-3511代表)までお問い合わせください。また、インターネット御利用の方は以下のアドレスにどうぞ。

<http://www.nopr.jp/~konet/>



教育の臨界点 (Critical Point)

— 「量」が「質」に転換する時 —

人間の努力が蓄積され、目標とした質的転換に至る瞬間は「教育の臨界点」と呼んでいいだろうと考えている。「臨界点」とは「量」が一定の限界に達して、まさにこれまでとは異なった「質」に転換する一点を意味する。辞書を引いてみると「臨界温度」、「臨界圧力」、「臨界状態」などの使用法がある。いずれもある種の条件が一定の限度をこえると、物質や物事の状態が一気に変わることを意味している。筆者の関心はプログラムがもたらす「教育の臨界点」である。

豊津寺子屋の終りの方で、子ども達の朗読を聞いた。一日の最終時間だった為か、些か緊張を欠いた子どもも散見されたが、総体的には見違えるばかりの成長であった。音頭朗々の「雨にも負けず」であった。佐賀市や穂波町のお客さまの拍手も「おまけのサービス」ではなかったであろう。少なくとも20日間、毎日2回ずつ朗読を繰り返した。悪評高い「詰め込み」の手法である。もちろん、テキストは見ない。1年生から6年生までおなかの底から声が出るようになった。詩も俳句も短歌も読み方に感情の移入もできるようになった。「臨界点」は2週間目ぐらいに来た。連続して積み上げた練習量の成果である。したがって、毎回、一週間のインターバルが空いてしまう土曜日のプログラムだけでは同じようには行かないであろう。

筆者が指導している英会話は寺子屋とは逆の結末を迎えている。学習者の拡大を配慮して、隔週1回のプログラムを3通り実施して来た。ことわざどおり、「3兎を追う者は一兎をも得ず」となった。隔週1回のプログラムでは質的転換が起りにくい。もちろん、志願して来た学習者は子ども達より遥かに熱心である。動機も明確である。自学自習もしているであろう。暗唱、朗読を基本とした「詰め込み」の学習法も同じである。しかし、子ども達のようには

行かない。2週間の「間」が空いてしまう隔週の勉強では練習量が積み上がって行かないのである。筆者のプログラム設定の失敗であった。来年度からは中期集中型の学習法に切り替えるつもりである。

長崎県壱岐市の霞翠小学校のモデル事業は2年目から子ども達の体力、学力、困難への挑戦の意欲などが一気に向上した。その理由も、毎日の練習量の積み上げが質的な変換を促した結果である。

子ども達にとっては何よりも中・長期の集中的プログラムが重要である。一泊二日のキャンプでは「量」は「質」に転換しない。二泊三日でも似たような結果である。環境への「慣れ」も、方法への「慣れ」も、興味・関心の「広がり」も、人間関係の形成も、意欲の「弾み」も3日目と4日目とは明らかに異なることはすでに筆者の野外教育研究で証明したところである^(*)。学校も、社会教育も、家庭教育も、細切れ指導では練習量が質的転換を促す「臨界点」に達しないのである。豊津寺子屋は夏休み毎日、霞翠小学校は学期中の毎日、同じプログラムを繰り返した。量が質に転換したのはその為である。

その意味で学童保育に教育プログラムを導入できないのはまことに不幸である。また、学校教育が集中的な朗読や計算ドリルなど「詰め込み」の指導を排除して来たこともまことに不幸なことである。子ども達の発達の「旬」、「学ぼう瞬間 (Teachable Moment)」がいちばん豊かな時期に「保育」という名の「囚われた時間」を過ごすことは子どもの不幸である。「詰め込み」に反発するあまり学校教育の中で基礎知識を学んでいない子ども達もまことに不幸である。日本社会はこのような「教育の浪費」にいつ気付くのであろうか？

すべきである。しかし、である。台風の余波が報じられた時、或いは、お盆が近い時、当方が草臥れた心身を鼓舞して公民館に辿り着いてみると、教室には誰もいない。ぼつぼつ集まって半数にも満たない学習者を前に授業をする。がっかりである。学習者には欠席の自由はあっても、ボランティア指導者には欠席の自由はない。”俺だって忙しいんだ”と思うのは人情である。何であなた方のようなちゃらんぽらんな学習者の指導をしなければならんのか？卒直な感想が沸き上がって来る。”冗談でないよ”と思う。ボランティアの失望が始まるのはこの時である。来年度から「入門」のクラスは落とすことに決めた。最大の理由は、クラスを限定して、集中的に指導して、その成果を見たいということだが、二番目の理由は入門クラスは「移り気」で、「無責任」であるからである。4年間の経験から判断すると、「初級」クラスは熱意も、継続性もある。「初級」に至るまで、ある程度英語を積み上げて来た皆さんは、まだ英会話を始めたばかりの「入門」の皆さんに比べて英語の価値も、指導者の価値もより具体的に分かって下さるような気がする。「理解されること」、「評価されること」、「待たれている

こと」は、ボランティアで指導している筆者のエネルギー源である。学習者の方は「やすい」受講料のクラスをサボることに苦痛はない。しかし、指導者の方は受講料が高かろうが、安かろうが、「費用弁償」を受けている限り、ボランティアは社会との契約である。契約を一方向的に破棄して欠席するわけには行かない。

筆者は、自分を理解しない相手に向かってひたすら尽くすというような高尚なサービス精神は持ち合わせていない。恐らくそれは筆者に限ったことではあるまい。日本のボランティア底辺が広がらないのが何よりの証拠である。多くのボランティア活動はまことに馬鹿馬鹿しいのである。世間も、行政も、ボランティアに対する「理解」と「評価」と「感謝」の表現方法を知らない。普通の人間は自分の「エネルギー投資」の意味を評価しない状況には耐えられない。「社会的承認」の得られない活動をつけるのは、聖人か、アホである。筆者は聖人にはなれない。アホにはなりたくない。日本はボランティア「後進国」なのである。未だ「開発途上国」にもなっていない。

MESSAGE TO AND FROM

メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★ 福岡県直方市 川口克代様

年度の途中にもかかわらず過分の郵送料を頂き恐縮しております。ご指摘の「保教育」概念はこれからの子育て支援の中心になるはずですが。従来の学童保育も、子育て支援も教育プログラムと指導者が不在のため、子ども達の発達支援にはなり得ていませんでした。一方の、青少年プログラムは散発的である上に、恒常化のシステムが不在のため、保育の機能は全く果たし得ませんでした。近々に、市長村長が集まる研修会で基調講演を担当します。「選挙に勝つ生涯学習政策」という

「隠しタイトル」で「保教育」を中心とした子育て支援策を提案してみます。通常は、市民の必要に鈍感な政治家も選挙権の半分は女性が握っているという事実には注目せざるを得ないでしょう。

★ 佐賀県佐賀市 馬場三恵子様

佐賀市女性の会の皆さん、福岡県穂波町の行政の責任者、同じく豊津町の寺子屋事業の実行委員が一堂に会した風景は圧巻でした。参会者の協議もまた興奮を禁じ得ませんでした。質問をお聞きして佐賀市の皆さんの理解力に敬服いたし

ました。エネルギーがエネルギーに出会い、熱意が熱意に出会う時、様々な知恵が湧くことも目の当たりにしました。遠いところを遥々とお苦勞さまでした。皆様が得たであろうもの以上に、説明した穂波と豊津が得たものは多かったように感じました。他者に説明し得た時、自分の中にストンと落ちるものがあることは、子どもも大人も同じなのだと思感した次第です。

★ 熊本県本渡市 富崎剛章様

研修の感想のまとめをありがとうございました。天草講演に際して、参加者のご質問や、ご注文を契機に、合併後の公民館の方向転換の論理的根拠を明らかにすることができました。従来の「学級・講座」をすべて自主的な学級に任せよ、という提

案はいささか極論に聞こえるかも知れませんが、現在の地方財政、現状の公民館職員の配置状況の中ではそれ以外の選択肢はありません。8月のフォーラム論文および本号の巻頭小論にまとめてみました。御批判ください。

★ 京都府亀岡市 山下ひろ子様

このたびは遥々福岡の第48回生涯学習フォーラムにお出かけいただき一同大変刺戟を受けました。京都でおやりになっていることも、福岡でやろうとしていることも方向と目的が同じだということで夕食会の話題になりました。こちらの事業も着々と進めますのでし御事情が許せば秋から冬のどこかで再びお目にかかる機会があれば楽しいことでしょう。ご参加本当にありがとうございました。

◆ 11月 「移動フォーラム」のお知らせ ◆

8月の企画委員会で2004年の移動フォーラム案が決定しました。少し早いですがご予約の中に入れていただきたくお知らせ申し上げます。振るって「孔子の里」佐賀県多久市までお出かけください。

「文化芸術による創造のまち」フォーラム in 多久

- ◆ 1 ◆ 日時 平成16年11月20日(土)13:30～16:30
- ◆ 2 ◆ 場所 佐賀県多久市 中央公民館大ホール
- ◆ 3 ◆ 次第 総合司会 林口 彰(孔子の里)
- 13:30 論語朗誦 多久保育園児
- 13:40 開会 尾形善次郎(教育長)
- 13:45 主催者あいさつ 横尾 俊彦(市長/実行委員長)
- 13:50 基調講演 現代に生きる論語(仮) 講師交渉中
- 14:40 多久市納所小学校児童
- 15:00 インタビュー・フォーラム;
- 「いま、なぜ朗誦か?子どもの学力の基本条件」
- 第1部 基調提案 「朗誦を巡る諸問題(仮)」 三浦清一郎
- 第2部 登壇者: 横尾 俊彦(市長)、市丸 悦子(中部小学校)
- 森本 精造(福岡県穂波町教育長)、柿木スミ子(元多久保育園保育士)
- 司会: 三浦清一郎
- 16:30 西山 英徳(多久市文化連盟会長)
- ◆ 4 ◆ 連絡先 多久市 財団法人「孔子の里」 TEL:0952—75—5112 (担当:田島)

過日、お招きいただいて何度目かの佐伯の地を踏んだ。大分県南海部郡に隣接する城下町で宮崎県との境目に位置している。東の間の時間であったが、ご案内いただいた武家屋敷通りに立って往事を偲んだ。セミしぐれが降り注ぐ暑い、暑い日であった。保存された屋敷の一軒が明治の文豪国木田独歩の記念館として保存されていた。学芸員であろうか、若い女性職員が懇切に説明してくれたが、汗を滴らせた皆さんに気の毒で、上の空で聞いた。帰りにご好意で一冊の本をいただいたが、多忙の中で鞆の底にしまいこんだまま忘れ果てていた。ところが、先日の台風15号が九州に上陸するというニュースのお陰で再び巡り会うことになった。遠隔地の講演に穴を開けたら一大事である。取るものも取り合えず列車に飛び乗って行けるところまで行った。慌てたので読み物一つ持っていない。その時鞆の底から出て来たのが『豊後の国佐伯』であった。この本には表題の「豊後の国佐伯」を始め、独歩の短編傑作「源おじ」や「春の鳥」なども収録されていた。旅のつれづれに初めから終りまで一気に読んだ。26歳の青年英語教師独歩は乞われて佐伯の鶴谷学館で教鞭を取る。英国の詩人ワーズワースに傾倒していた独歩は佐伯の自然に深く共鳴する。城山はその中心であった。わずか9か月の滞在にもかかわらず佐伯の自然、人情、歴史に触れたひとつひとつの体験は独歩の精神のふるさとになった。独歩は森にふくろうを聞き、番匠川の流れを下り、彷徨う乞食の少年に「世の外に住む人」を見る。「世の外に住む人」という概念は筆者の驚きであった。それは「人であるのか、ないのか」？ 筆者も、痴呆高齢者の虐待とその人権問題に関して、虐待が起る原因は「この世の外に住む人」の無反応であると論じた事がある。筆者は「人間を止めた人間」と書いた。独歩は白痴の少年にそれを見たのである。これらの観念及

び感慨はやがて「源おじ」や「春の鳥」などの傑作に結晶する。私は教科書でならった「空知川の岸边」しか知らなかったが独歩文学の新しさにあらためて驚いた。また、その根底に異郷の地であった佐伯が独歩の精神のふるさととして機能していることがもうひとつの驚きであった。独歩は毎日のように城山に登った。「佐伯の春まず城山に來たり、夏まず城山に來たり、秋また早く城山に來たり、冬はうど寒き風の音をまず城山の林に聞くなり」と書いている。波乱万丈の一生の中で唯一独歩が自然の中で生活した時間であったろう。人生の不思議を見る思いである。

筆者にも毎日通う森がある。森には、誰かがはやりのアホな名前を付けたので私が勝手に「カイザーの森」と改名している。カイザーは「皇帝」。我が生涯スポーツの友である小犬のカイザーである。執事の私は毎日「皇帝」のお供をして森へ行く。毎日通っていると風景の変化がよく分る。過日は池のほとりに初めて月見草の花を見た。これから萩が咲く。すすきも穂を出す。うし蛙の野太い声が静寂に響き渡る。いつのまにかひぐらしのセミしぐれがツクツクボウシに変わった。水源涵養の森は思った以上に深い。見かけ以上にのぼり下りも急である。小道に分け入れればほとんど登ってくる人はいない。2年間登り続けて独歩と同じような感慨を持つようになった。『宗像の春まずカイザーの森を桜でちりばめる。初夏はあざみ、盛夏になると森の頂きに百日紅の紅をかかげる。秋また早く月見草で飾る。冬は小道という小道を真っ赤な山茶花の花びらで埋める。』すこしずつ自分の中に森の自然が沈黙して行く気がする。独歩のような物語を書きたいと思う。生涯学習では何にもましてプログラムが大切であるが、自然体験の最終プログラムは自然の中で暮らすことであろう。サラリーマンの職業を離れて初めて精神のふるさとに巡り会った気がする。

「編集事務局連絡先」(代表) 三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵厳寺2丁目15-16

TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

「風の便り」の購読について 購読料は無料です。ただし、郵送料のご負担をお願いしております。「編集事務局連絡先」まで、90円切手4枚 または 現金(360円)をお送り下さい。

*尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいた御感想、御意見には御返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。 「オンライン『風の便り』」 <http://www.anotherway.jp/tayori/>